

周船寺遺跡 5

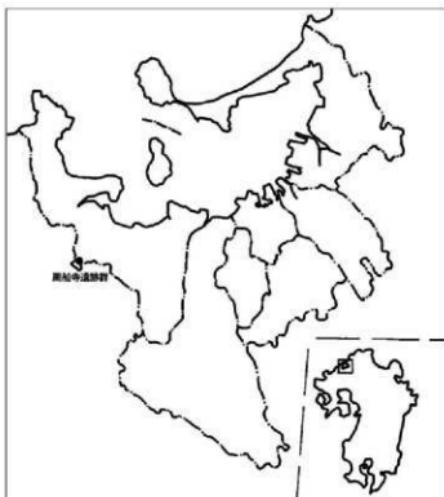
福岡市埋蔵文化財調査報告書第798集

2004

福岡市教育委員会

周船寺遺跡 5

福岡市埋蔵文化財調査報告書第798集



周船寺遺跡群第14次 調査番号0226
遺跡番号 SSJ-14

2004

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に努めているところです。

本報告による周船寺遺跡群第14次調査では、特に縄文時代晩期の遺物を多く確認することができ、当時の歴史的環境を知る上で貴重な成果を挙げることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心からの謝意を表します。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　言

1. 本書は平成14年度（2002年度）に福岡市教育委員会が実施した周船寺遺跡群第14次調査の発掘調査報告書である。調査地点の所在地は別表によられたい。
2. 遺構の実測は、阿部泰之が行った。
3. 遺物の実測は、土器・剥片石器を阿部が、礫石器を平川敬治が、玄武岩製の石器を矢野幸子が、Fig.20掲載の石製品を山崎純男が行った。
4. 製図は、阿部・井上加代子・副田則子・安野良が行った。
5. 写真撮影は、阿部が行った。
6. 遺構番号は、全遺構の通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。
遺構番号は、溝（SD）で表している。
7. 遺物番号は、通し番号とした。
8. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
9. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
10. 本書の執筆・編集は阿部が行った。

調査番号	0226	事前審査番号	14-2-99	遺跡略号	SSJ-14
所在地	西区大字飯氏字井町9-2-1-2		分布地図番号	Na132 千里	
開発面積	1341.57m ²		調査面積	488.3m ²	
調査期間	2002年8月1日～2002年9月20日		担当者	阿部 泰之	

本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II.位置と環境	2
III.調査の記録	
1. 調査概要	5
2. 遺構と遺物	
①溝（SD）	5
②上層出土の遺物	8
③下層谷状地形出土の遺物	15
④検出面出土の遺物	18
3. おわりに	18
4. 出土石器・剥片類観察表	19

挿図目次

Fig.1 周船寺遺跡群の位置と周辺の遺跡（1/25,000）	3
Fig.2 調査区位置図（1/1,000）	4
Fig.3 SD01溝出土遺物実測図（2/3）	5
Fig.4 調査区全体図（1/200）	6
Fig.5 調査区南壁土層断面実測図（1/80）	7
Fig.6 下層谷状地形土層断面実測図（1/40）	7
Fig.7 SD01溝土層断面実測図（1/20）	7
Fig.8 SD01溝出土杭列実測図（1/20）	8
Fig.9 上層出土精製土器実測図（1/3）	8
Fig.10 上層出土土器実測図①（1/3）	9
Fig.11 上層出土土器実測図②（1/3）	10
Fig.12 上層出土石器実測図①（2/3）	11
Fig.13 上層出土石器実測図②（2/3）	12
Fig.14 下層谷状地形出土精製土器実測図（1/3）	13
Fig.15 下層谷状地形出土粗製土器実測図（1/3）	14
Fig.16 下層谷状地形出土石器実測図①（2/3）	15
Fig.17 下層谷状地形出土石器実測図②（2/3）	16
Fig.18 下層谷状地形出土木材実測図（1/4）	17
Fig.19 検出面出土遺物実測図（2/3）	18
Fig.20 B-5 グリッド出土石製品実測図（1/3）	18

図版目次

- Pl. 1 1. 調査区全景（北より）
2. SD01溝検出状況（西より）
3. 下層谷状地形検出状況（西より）
- Pl. 2 1. SD01溝杭列検出状況（西より）
2. C-3グリッド上層遺物出土状況（南より）
3. 下層谷状地形被熱蹠出土状況（北より）

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成14年5月21日、末松真由美氏から、共同住宅建設に伴う西区大字飯氏字井町921-2番地（面積：1341.57m²）における埋蔵文化財事前審査申請書が、教育委員会文化財部埋蔵文化財課（以下、埋文課）に提出された（事前審査番号：14-2-99）。申請地は、周知の文化財包蔵地である周船寺遺跡群（分布地図番号：132、遺跡略号：SSJ）の範囲内であった。そのため、これを受ける形で、同課は、申請地内にて造構の遺存状態確認のため、平成14年5月30日に試掘調査を実施した。その結果、縄文時代晚期の良好な包含層が検出された。

この結果を基に両者で協議を行った結果、建築工事に伴う基礎工事によって包含層が広範囲にわたり損傷するため、記録保存のための発掘調査が必要であると決定した。

その後、委託契約を締結し、平成14年8月1日より、周船寺遺跡群第14次調査として本調査を実施、翌平成15（2003）年度に資料整理・報告書作成を行うこととなった。

2. 調査体制

調査体制は、下記の通りである。本調査・整理作業・報告書作成は、末松英治氏、株式会社未来岡建設をはじめ、関係者および周辺住民各位の理解・協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

調査委託	末松真由美
調査主体	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
教育長	生田 征生
文化財部長	堺 敬
埋蔵文化財課長	山崎 純男 同調査第1係長 力武 卓治
試掘調査担当	久住 猛夫
調査担当	阿部 泰之
庶務担当	後藤 泰子 川村 浩旭（前任）
調査作業員	石田 照江 木戸アサノ 木戸 和子 近藤ノリ子 柴田ツネ子 柴田 トシ 柴田 種美 辻 節子 辻 哲也 友池富美恵 中田トメ子 中村 栄子 松本 美文 那賀 久子 森友 ナカ
整理作業員	窪田 慧 黒 早苗

II 位置と環境

周船寺遺跡群が立地する糸島平野は、高祖山・飯場山・井原山などの標高400から700mを測る山系から北に高度を漸減させながら広がる糸島扇状地と、加布里湾と今津湾を結ぶ帶状の湿地帯である糸島低湿地帯とに大別することができる。

周船寺遺跡群は前述した糸島扇状地の末端部、今宿平野との境界付近に立地する。付近には、縄文晩期の住居跡・埋甕が出土した三雲遺跡群、同様の遺構が検出されている飯氏遺跡群などが分布する。

周船寺遺跡群における既往の調査は、本報告を含め14次にわたる。以下、報告書刊行済みのものに限り、内容を概観したい。

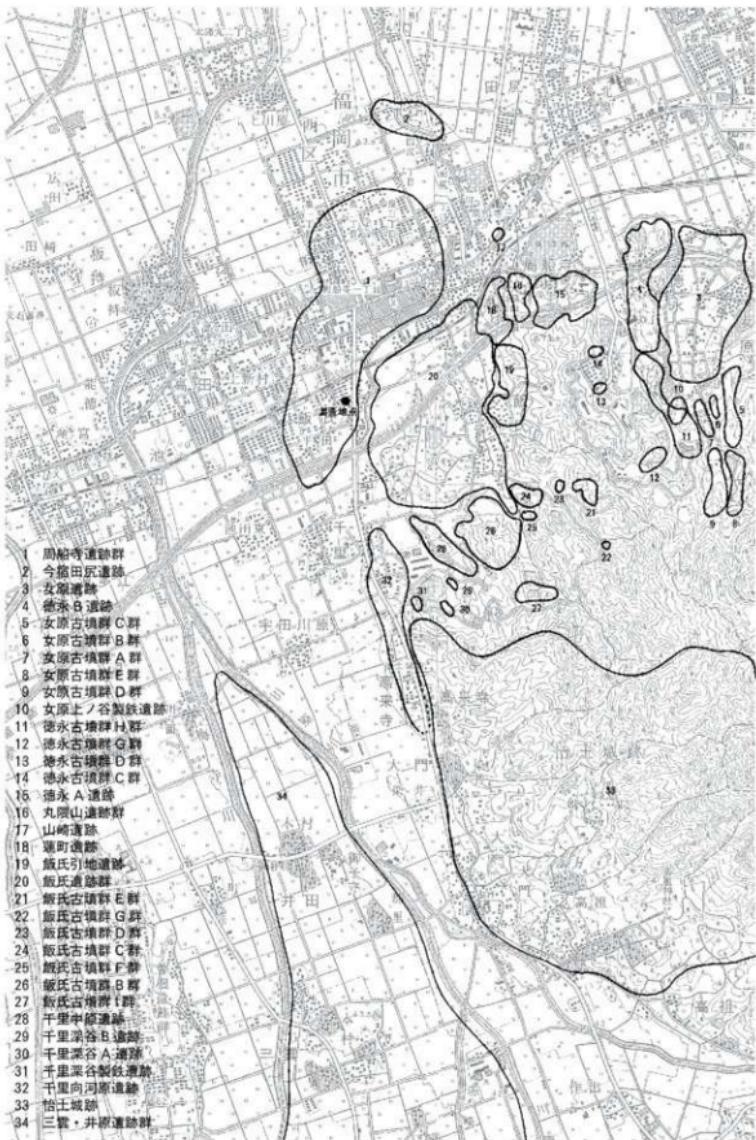
第1次調査は、「千里シビナ遺跡」として1979年に実施された。筑肥線の南側、14次調査区に比較的近い位置である。堅穴住居1軒・溝3条・埋甕1基・ピットが検出され、このうち住居は弥生前期末、溝のうち1条が板付II式以降、残り2条が縄文晩期後半から末頃とされる。石器が豊富に出土しており、調査者は、「本遺跡が沖積地に立地する条件より、縄文後期後葉には、本遺跡周辺に点在する縄文後晩期貝塚などの慣習性遺跡とは生活基盤を異にするグループの析出があったと考えられる」と指摘している。

第6次調査は、国道202号線今宿バイパス建設に伴い1990年に実施された。甕棺群・土壙・掘立柱建物、縄文晩期の包含層が検出された。甕棺群は、弥生前期後半の所産で、日常品が転用され、うち1基から管玉が1点出土している。土壙は弥生中期とされ、一部の調査区内では、もっとも高いところに集中している。30基検出された。うち1基から丹塗磨研の壺形土器が多く出土し、調査者は祭祀用の土壙としている。掘立柱建物は2棟検出され、1棟が倉庫とされ、1棟は、祭祀あるいは首長者層の居館に関連する建物の可能性が指摘されている。

第10次調査は、JR筑肥線複線化に伴い1997年に実施された。甕棺墓・貯藏穴・土壙・溝・堅穴住居が検出され、甕棺墓は弥生前期末から中期初頭、貯藏穴は弥生前中期後半、木の実が多量に出土している。堅穴住居からは鉛の歯が1点出土している。掘立柱建物・柵列が検出されており、調査者はその配置に企画性を認めている。

第11次調査は、共同住宅建設に伴い1998年に実施された。甕棺墓・堅穴住居・土壙・溝状造構・縄文遺物包含層が検出された。甕棺墓は、弥生前中期から中期初頭、中期後半の2時期に分かれる。堅穴住居からは、弥生土器が少量出土しているが、時期の決め手には欠けている。溝状造構は、弥生中期中頃から後半の遺物が出土する。方向から3類形に区分され、調査者は、「この種の溝が広い範囲にわたって掘削された遺構群を構成する要素として位置づけられ、このことをふまえて遺構の性質・この地区的遺跡の全体像を論じる必要がある」と指摘している。

第13次調査は、市営住宅建て替えに伴い1999年に実施された。埋甕・土壙・堅穴住居・溝・耕作痕・ピット・縄文土器包含層が検出された。埋甕は、縄文晩期の所産。土壙は、縄文時代と弥生時代の2時期。堅穴住居は、弥生前中期後半の所産とされる。一部の住居から、玄武岩の細片・粉・敲打具などが出土し、石斧制作が行われたことが指摘されている。報告者は、周囲の調査例から、調査地周辺を弥生前期集落の中心地の一角としている。



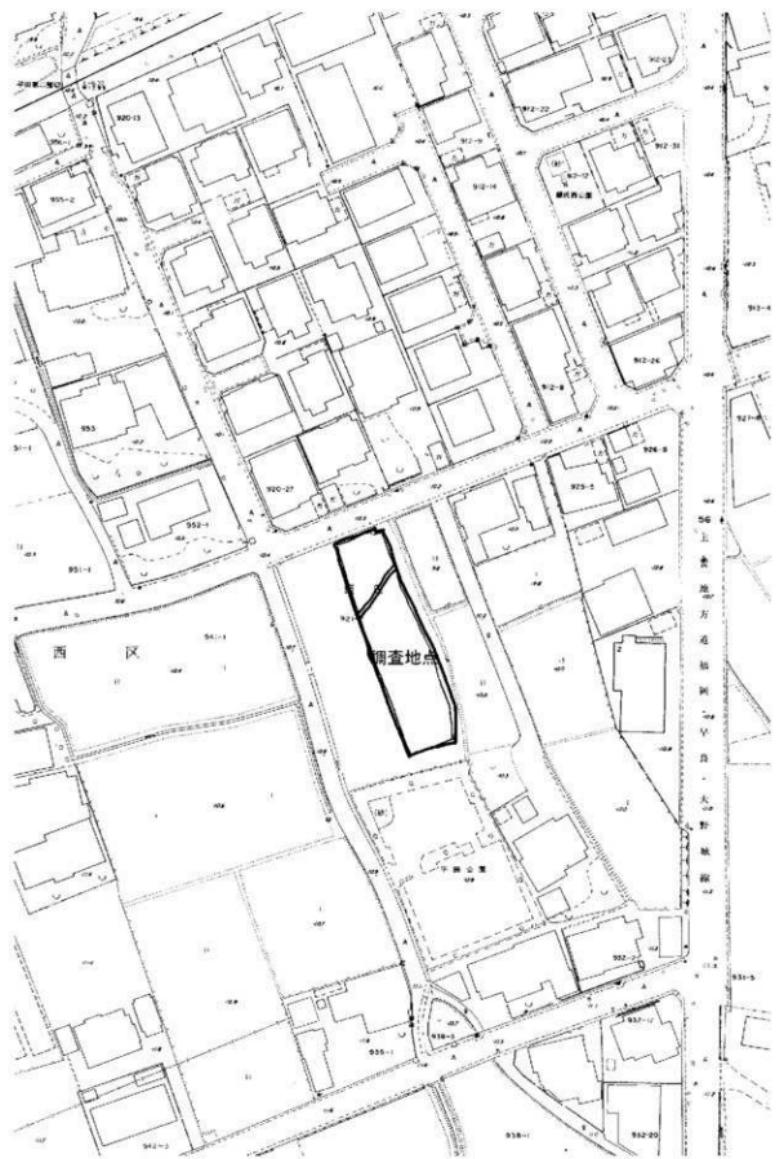


Fig.2 調査区位置図 (1/1,000)

III 調査の記録

1. 調査概要

周船寺遺跡群第14次調査地は、遺跡群の南部、周船寺川に面する遺跡推定範囲の東端部に位置する。遺構は、表土からマイナス約80cm、暗黄褐色シルト質土で検出される。検出面は、縄文晩期～弥生前期にかけての遺物包含層となっており、緩やかに東に向かって標高を下げる。検出された遺構は、溝1条である。後述する谷状地形とほぼ方位を同じくする。

先に述べたが、溝の下層には谷状の地形が存在した。幅2~4.4m、深さ0.5mを測り、多くの遺物が出土した。ここでは、Fig.5, 6にしめす断面図第4・5層を遺物包含層とし、暫定的に「上層」とする。当該土層に切り込む遺構の調査と平行し、2m×2mのグリッドを調査区全体に組み、掘り下げを行い遺物の出土状況を確認した。ただし、下層の谷状地形上のグリッドでは、谷の遺物が多く混じってしまった。

第5層に覆われる形で、谷状の地形が検出される。暫定的に「下層谷状地形」とする。おおよそ南西から北東に向かって走っており、上層の溝もこれに方位を一にする。この地形は、本調査区の西200mに位置する第13次調査区周辺から、周船寺川方向に伸びる形になっていた可能性が高い。

2. 遺構と遺物

①溝（SD）

SD01 溝（Fig.4・7・8）

調査区北半部にて検出した。磁北から37° 東に偏してほぼ直線的に伸びる。幅50から70cm・深さ25cmを測る。断面形状は、隅丸台形を呈する。遺物は、Fig.3に挙げたもの他に縄文土器片が出土したが、下層の遺物が混じってしまったため正確な時期は不明である。溝の中には砂礫が堆積しており、流水のあったことが推定される。また、東側で杭列を検出した（Fig.8）。残存長5~20cm、幅6cmの板杭を4本、疎に打ち込む。杭は取り上げたが、腐食が進み図化し得なかった。

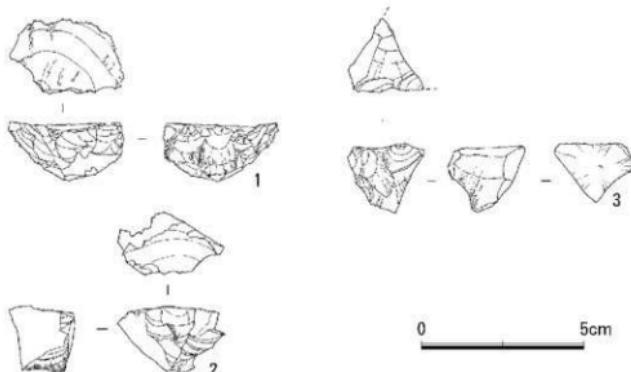


Fig.3 SD01 溝出土遺物実測図 (2/3)

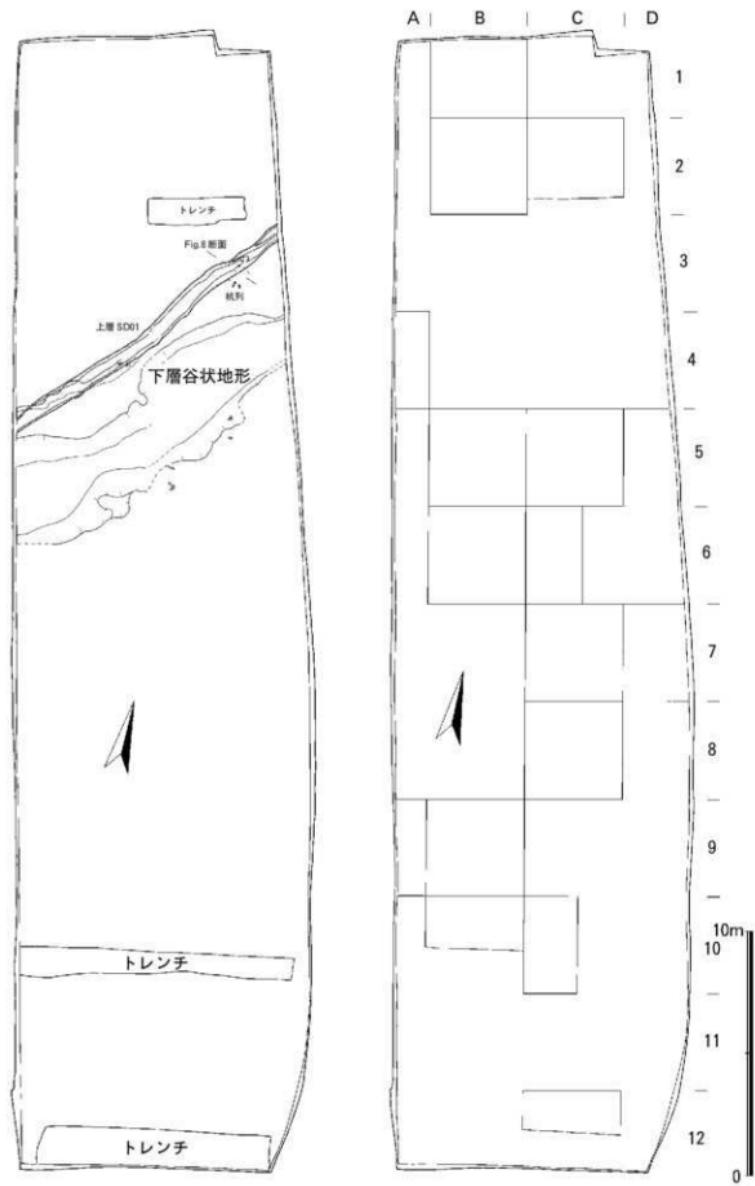


Fig.4 調査区全体図 (1/200)

H=10.60m

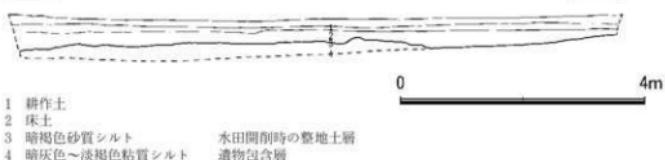


Fig.5 調査区南壁土層断面実測図 (1/80)

H=10.50m

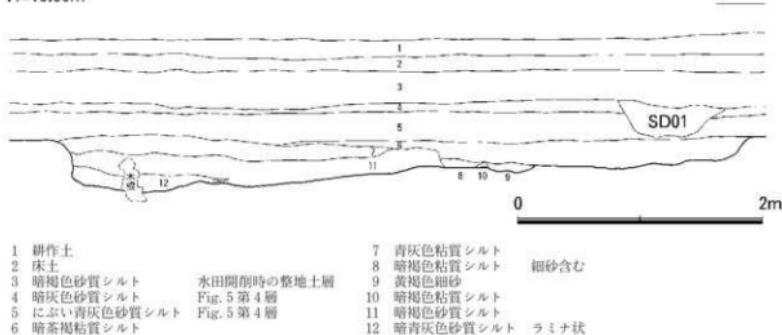


Fig.6 下層谷状地形土層断面実測図 (1/40)

出土遺物 (Fig.3)

SD01溝出土遺物のうち、図化に耐えるものをFig.3に示した。

1・2は、黒曜石の不定形剥片の石核である。1は、平面打面を作りだし、4方向からの剥片採取を行う。とれる剥片は、最大1.5cm程度であろう。打面の反対側は、自然面を残す。重量は、11.5gを測る。2は、平面打面を作り出し、そこから2方向の剥片採取を行っている。

とれる剥片は、最大1.5cm程度か。重量は、9.4gを測る。3は、サヌカイトの石核である。

4面体状を呈するが、この個体は、被熱して破裂しており、その痕跡を図右側に描出した。故に、本来はさらに大きい石核であったと思われる。上面に平面打面を作りだし、確認できるだけで2方向から剥片採取を行っている。とれる剥片は、最大2cm程度か。重量は、6.28gを測る。

3点とも、本来上記最大長程度の不定形剥片を採取できた石核であったと思われるが、現状の段階で剥片剥離に失敗し、小さいものしかとれなくなつたため廃棄されたものの可能性が考えられる。

H=10.00m

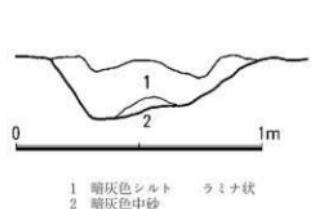


Fig.7 SD01 溝土層断面実測図 (1/20)

②上層出土の遺物 (Fig.9・10・11・12・13)

Fig.5・6に示した第4・5層出土の遺物についてFig.9から13に示す。各層で遺物を分けて取り上げ得なかったため、いったん遺物を一括し、土器は、外面を研磨して仕上げるものを精製土器、条痕文を施すものを粗製土器と大別し、掲載した。石器は、剥片石器・石核と、礫石器・石斧に分け挿図を組んでいる。

精製土器 (Fig.9)

4は、小型の深鉢である。1/4個体程度残存し、口径は復元で12.6cm・胴部最大径11.2cmを測る。

口縁内面にわずかな段を有し、内外両面とも幅広な研磨を施す。5～7は、浅鉢である。5は、肩部から頸部にかけての小片である。外面研磨調整がよくのこる。胎土は精良。6は、肩部から頸部にかけての小片である。内外両面とも研磨調整が観察される。胎土は精良で、焼成は良好である。7は、口縁部の小片である。胎土は精良で、焼成は良好である。8は、鉢形土器の口縁部と思われる。小片であるが、蝶形突帯の部分が残存する。9は、浅鉢の胴部小片である。胎土は精良で、焼成は良好である。10・11・12は、塊形土器である。10は、口縁部から胴部にかけての小片である。

口縁部に山形の突帯をもつ。調整は、内外両面とも磨滅のため不明瞭だが、研磨調整と思われる。

11は、口縁部から胴部にかけての小片である。口縁内面に鈍い稜をもたせやや厚くつくる。胎土は精良で、焼成は良好。12は、口縁部から胴部にかけての小片。口縁内面に不明瞭な凹線をもつ。内外両

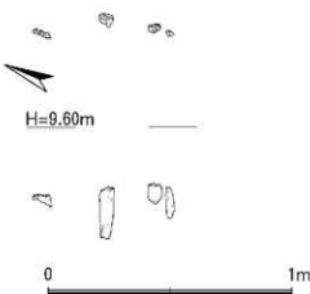


Fig.8 SD01 溝出土杭列実測図 (1/20)

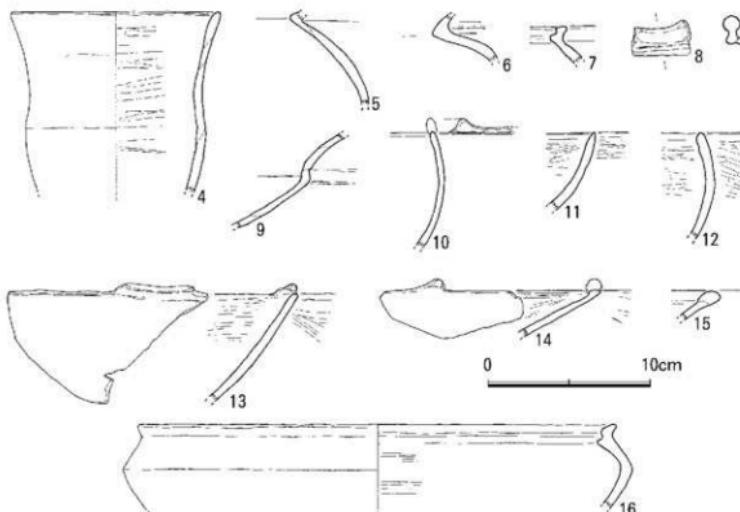


Fig.9 上層出土精製土器実測図 (1/3)

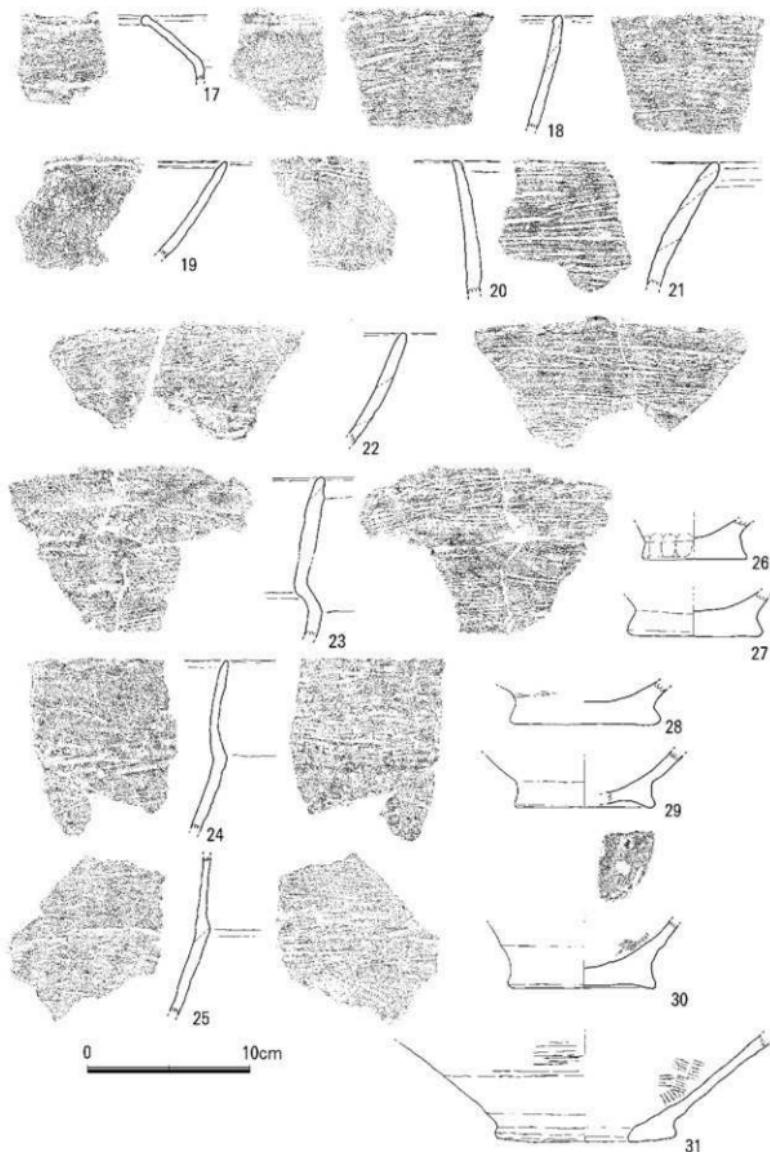


Fig.10 上層出土土器実測図① (1/3)

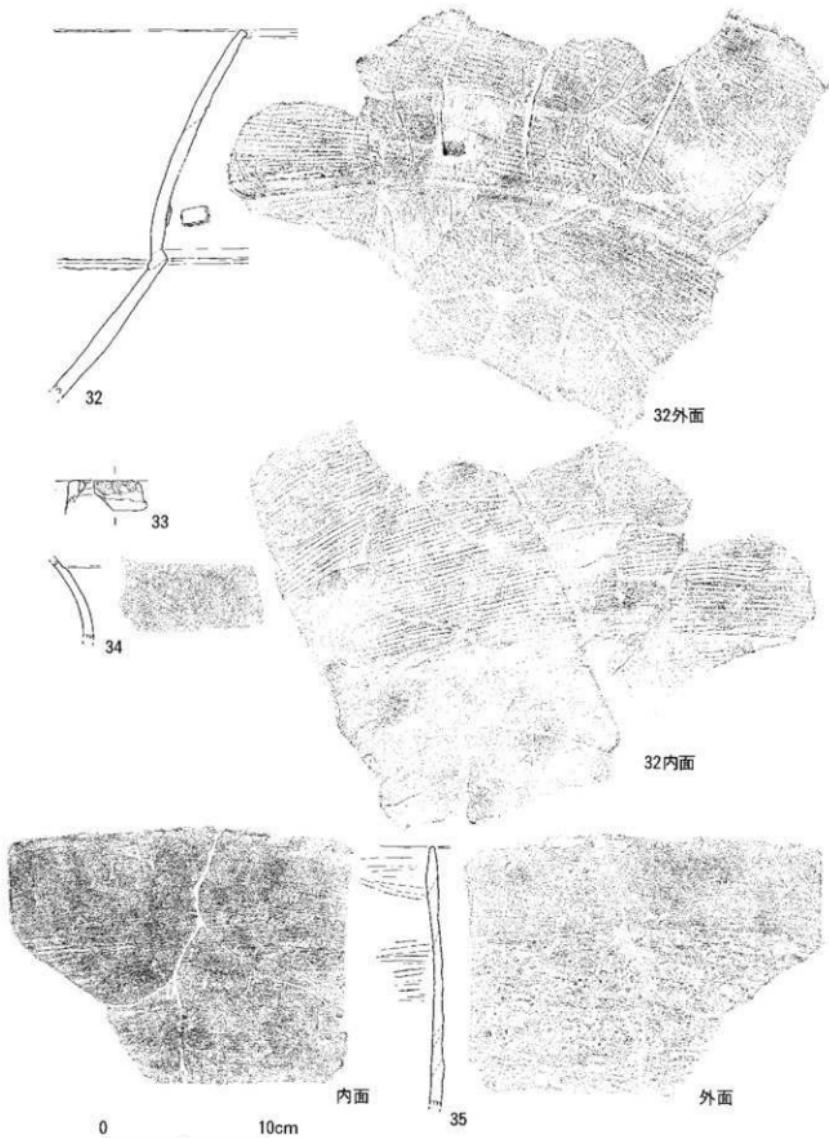


Fig.11 上層出土土器実測図② (1/3)

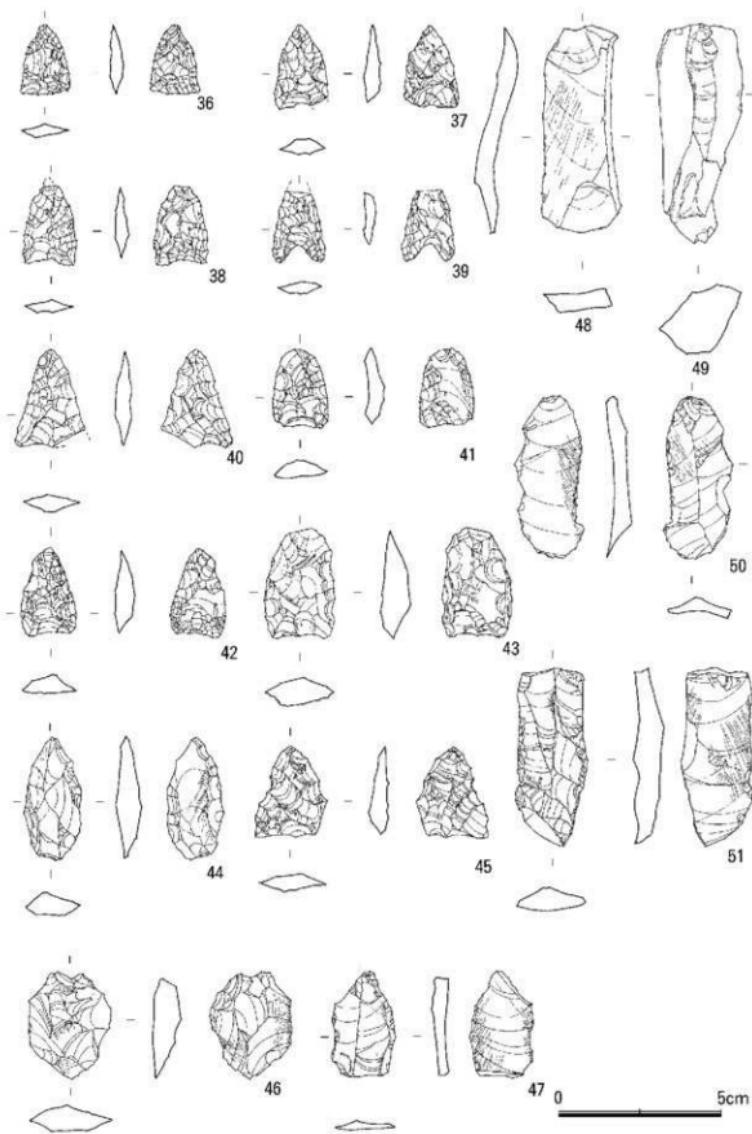


Fig.12 上層出土石器実測図① (2/3)

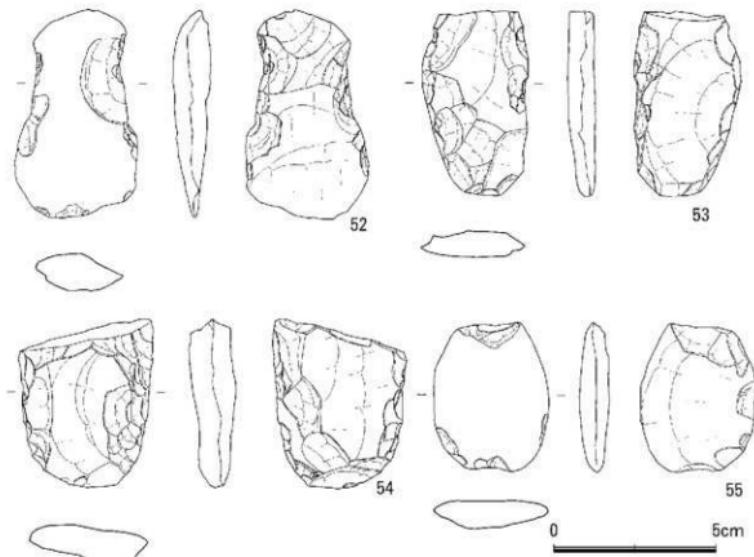


Fig.13 上層出土石器実測図② (2/3)

面とも研磨調整。胎土は精良である。13から16は、浅鉢である。13は、口縁部から胴部にかけての破片で、口縁で1/8程度の残存。口縁部に蝶形突帯をもつ。14は、口縁部の小片である。口縁を内側に肥厚させ、山形の突帯をもつ。15は、口縁部の小片。いずれの個体も研磨調整で、胎土は精良、焼成は良好である。16は、口縁部から胴部にかけての破片である。口縁で1/6個体程度の残存。

粗製土器 (Fig.10)

いずれも深鉢である。底部については、わずかに残る胴部の傾きから深鉢に分類した。

17は、口縁部の小片である。口縁部直下を両面からくぼませている。18は、口縁部から胴部にかけての小片である。口縁内面に稜を持つ。19は、口縁部から胴部にかけての小片である。20は、口縁部から胴部にかけての小片で、内側に傾く。21は、口縁部から胴部にかけての小片で、口縁外表面をやや肥厚させ、全体にやや厚づくりである。22は、口縁部から胴部にかけての小片。外面に炭化物が付着する。胎土には砂粒が多い。24は、口縁部から胴部にかけての破片で、口縁で1/6程度残存する。外面下半には、炭化物が付着する。25は、胴部の破片である。外面に炭化物が付着し、内面は、条痕文を施した後ナデ調整を行う。以上すべての土器は、胎土精良で、焼成は良好である。26から31は、底面である。26は、完存しており、底径6.2cmを測る。全面ナデ調整。胎土は精良で、焼成は良好である。27は、完存しており、底径8.0cmを測る。内外両面ともナデ調整。胎土は精良で、焼成は良好である。28は、完存しており、底径8.3cmを測る。わずかに残る胴部に条痕文が観察できる。焼成は良好である。いずれの破片も、底面は平坦につくる。29は、底面の1/4残存する破片である。内外両面に条痕文が観察される。底面に、長径1.2cm・短径0.6cm・深さ0.5cmの圧痕が観察できる。復元で、底径は8.4cmを測る。30は、完存し、底径8.6cmを測る。内面に条痕文をもつ。胴部外間に1条の鈍い稜

が観察される。以上2個体は、底面を上げ底につくる。31は、底部で1/2残存する破片である。復元底径は、10.6cmを測る。内面および外面上半に条痕文を有する。

粗製土器・その他突帯文・弥生土器 (Fig.11)

32・35は、深鉢である。いずれも口縁部から胴部にかけての破片で、32は、胴部に長方形の粘土帯を貼り付ける。33は、突帯文をもつ口縁部、34は、壺形土器の胴部である。いずれも小片。

剥片石器・石核 (Fig.12)

36から40・42は、石鎚である。三角鎚に分類される。36は、黒曜石製で、器長2.2cm・幅1.5cmを測る。基部は、直線的である。37は、黒曜石製で、器長2.6cm・幅1.7cmを測る。基部にわずかに抉り込みを持つ。片方の脚部を欠損する。38は、黒曜石製で、先端を欠損する。幅1.5cmを測る。39は、サヌカイト製で、先端を欠損する。幅1.6cmを測る。40は、サヌカイト製で、片方の脚部を欠損する。器長3.0cmを測る。42は、黒曜石製で、基部に抉りを持った。器長2.7cm・幅1.7cmを測る。裏面に一部主要剥離面を残す。41・43は、石鎚未製品である。41は、黒曜石製で、長軸長2.5cmを測る。43は、サヌカイト製で、やや厚みのある剥片を用いる。長軸長3.4cm・最大厚0.9cmを測る。44は、サヌカイト製有茎式石鎚である。基部に一部Pebble面を残す。器長3.8cm・器幅1.8cmを測る。45は、石鎚未製品である。黒曜石製で、片方の脚部を欠損する。長軸長1.8cmを測る。46・47・48・50は、使用痕ある剥片である。46は、黒曜石を用い、片方の縁辺に使用痕が観察される。器長2.8cm・器幅2.5cmを測る。47は、黒曜石の縦長剥片を用い、先端を欠損する。両縁辺に使用痕が観察される。残存長3.2cm・器幅1.9cmを測る。48は、サヌカイトの縦長剥片を用い、片方の縁辺に使用痕が観察される。もう片方はPebble面を残す。器長5.4cm・器幅2.4cmを測る。50は、黒曜石の縦長剥片を用い、片方の縁辺に使用痕が観察される。器長5.0cm・器幅2.0cmを測る。49は、黒曜石の原石である。1カ所に試し打ちの剥離面が残る。長軸長6.7cm・重量39gを測る。51は、黒曜石製削器である。基部にPebble面を残す縦長剥片の両縁辺に調整剥離を施す。器長4.5cm・器幅2.1cmを測る。

上層出土の礫石器・石斧 (Fig.13)

52から54は、扁平打製石斧である。玄武岩製。52は、両縁辺に抉り込みを持つ。破損品を再利用したものか。器長8.55cm・刃部幅5.0cm、重量66.6gを測る。53は、横長剥片を用いた個体で、周間に細かい調整剥離を行う。器長7.6cm・最大幅4.4cm、重量55.4gを測る。54は、横長剥片を用いた個体で、周間に細かい調整剥離を行う。基部を欠損する。刃部幅4.8cm・重量86.5gを測る。55は、玄武岩製石鍤である。上下両端にノッチを入れる。長径6.1cm・短径4.7cm、重量51.1gを測る。

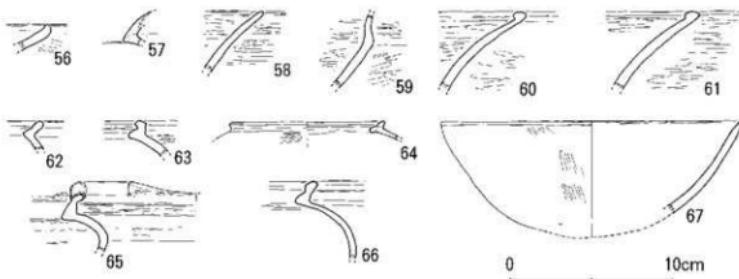


Fig.14 下層谷状地形出土精製土器実測図 (1/3)

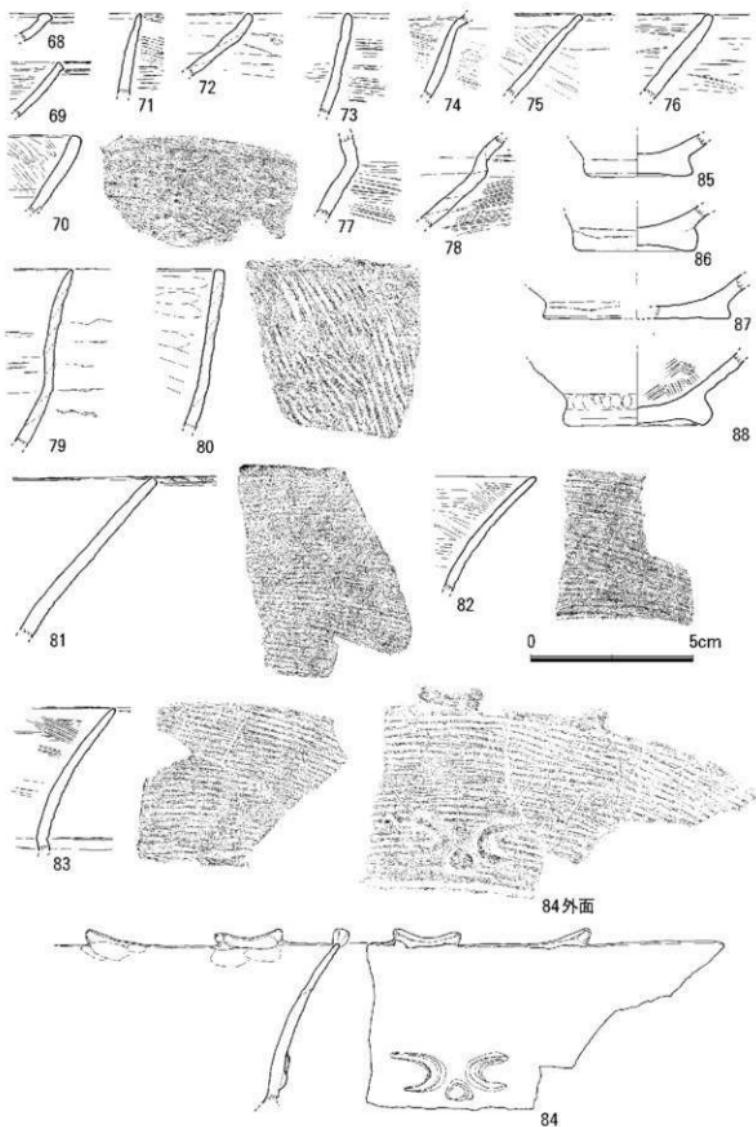


Fig.15 下層谷状地形出土粗製土器実測図 (1/3)

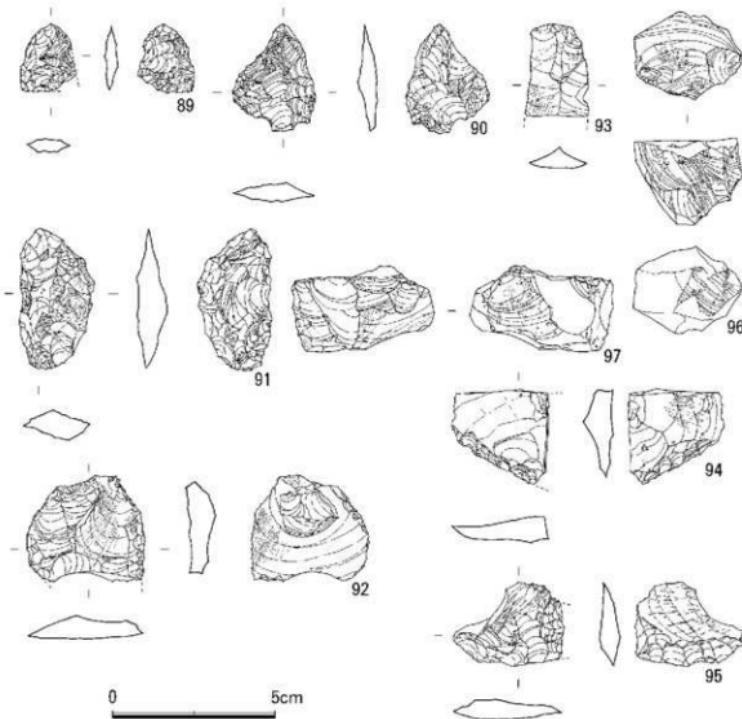


Fig.16 下層谷状地形出土石器実測図① (2/3)

③下層谷状地形出土の遺物

Fig.5・6に示した谷状地形内出土の遺物についてFig.14から18に示す。各層で遺物を分けて取り上げ得なかつたため、いったん遺物を一括し、土器は、外面を研磨して仕上げるものを精製土器、条痕文を施すものを粗製土器と大別し、掲載した。石器は、剥片石器・石核と、礫石器に分けて挿図を組んでいる。また、谷の底面から加工された可能性のある木材が1点出土したため、Fig.18に図示した。

精製土器 (Fig.14)

56から66は、浅鉢である。49は、口縁部の小片。両面に研磨調整を行う。57は、浅鉢の肩部から口縁部にかけての小片である。58は、口縁部の小片である。両面に研磨調整がよくのこる。59は、胴部の小片である。60は、口縁部の小片である。口縁を肥厚させるタイプ。外面にはやや疎な研磨調整を施す。61は、同じく口縁部の小片である。両面に研磨調整がよくのこる。62は、口縁部の小片である。口縁部内面に凹線が回る。63は、口縁部から肩部にかけての小片である。外面に研磨調整が残る。64は、口縁部から肩部にかけての破片で、口縁で1/6残存する。口径は、復元で9.2cmを測る。65は、口縁部から肩部にかけての破片である。両面とも研磨調整が見られ、口縁には、山形の突帯を貼付する。

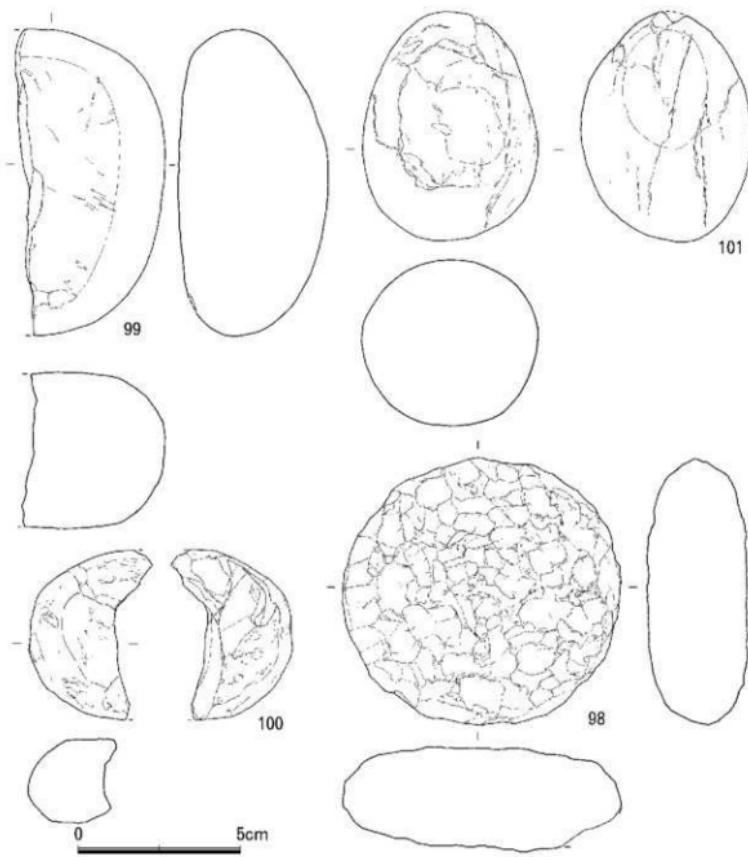


Fig.17 下層谷状地形出土石器実測図2 (2/3)

66は、口縁部から胴部にかけての小片である。67は、塊形土器である。2/3個体残存し、口径は復元で18.2cm・器高は、推定7.2cmを測る。内外両面とも研磨調整を施す。いずれの個体も、胎土は精良で、焼成は良好である。

粗製土器 (Fig.15)

68は、鉢形土器の口縁部小片である。焼成は良好である。69は、塊形土器である。口縁部の小片で、内面に研磨調整を施す。深鉢の口縁部小片である。70から73は、深鉢である。いずれも口縁部の小片である。70は、外面に炭化物が付着する。内面は研磨調整。74は、胴部の小片である。外面に炭化物が付着する。内面は研磨調整。75・76は、深鉢である。口縁部の小片。いずれも内外両面に条痕を

施す。77・78は、胴部の小片である。77は、外面に炭化物が付着する。78は、内面に炭化物が付着する。いずれの個体も、胎土は精良で、焼成は良好である。79は、深鉢の口縁から胴部にかけての小片である。外面に炭化物が付着する。80は、深鉢である。口縁部の小片。口唇部に刻み目を有する。外面に炭化物が付着する。74から76は、口縁部の小片である。81は、口唇部に刻み目を有し、外面に炭化物が付着する。82は、内面を研磨調整する。83は、外面に炭化物がかさぶた状に付着する。84は、深鉢である。口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部にリボン状突起を有し、頸部に粘土帯を用い文様を作り出す。外面は条痕文、内面はナデ調整。85から88は、底部である。85は、底径6.4cmを測る。86とも底面はやや上げ底状。86は、底径6.8cmを測る。87は、底部で1/4残存する個体。底面は平坦。88は、底径8.0cmを測る。胴部との接合部に指押さえの痕跡が残る。

剥片石器・石核 (Fig.16)

89は、黒曜石製石鎌である。片脚を欠損する三角鎌で、両縁辺にノッチ状の抉り込みをもつ。器長2.1cmを測る。90は、黒曜石の石鎌未製品である。基部に2カ所ノッチを入れる。器長3.3cm・器幅2.6cmを測る。91・92は、黒曜石製削器である。91は、器長4.8cm・器幅2.2cmを測る。片面に一部Pebble面を残す。92は、先端部を欠損する。縦長剥片を用い、片側の縁辺に細かい剥離を施し刃部とする。93は、黒曜石の使用剥片である。先端部を欠損し、両縁辺に使用痕が観察される。器幅1.8cmを測る。94・95は、サヌカイト製削器である。94は、横長の剥片を用い、下部縁辺を刃部となる。95は、上部にノッチを入れ石匙状につくる。刃部残存長2.6cmを測る。96・97は、黒曜石石核である。両個体とも上部に平面打面を作り出し、96は、2面から剥片採取を行っており、その他はPebble面を残す。重量21.85gを測る。97は、2面から剥片採取を行う。

礫石器・その他の石器 (Fig.17)

98は、安山岩製叩石である。上下にノッチ状の抉り込みが観察できるため、沈子の可能性も考えられる。長軸長11.9cm・短軸長11.5cm・重量827.3gを測る。99は、花崗岩製磨石である。約1/2個体の破片である。1面のみ擦痕が観察される。長軸長12.5cm・残存重量771.9gを測る。100は、軽石(ペミス)の円礫である。調査地周辺ではこの種の石材は産せず、持ち込まれたものである。浮子の可能性が考えられる。縁辺部にノッチ状の使用痕が観察できる。長軸長7.0cm・短軸長5.0cm・重量31.8gを測る。101は、円礫である。安山岩と思われるが被熱のため不明。全体に強く被熱し、全体に亀裂が見

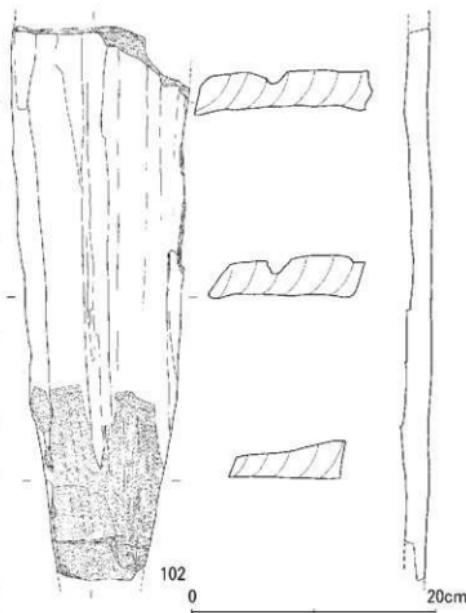


Fig.18 下層谷状地形出土木材実測図 (1/4)

られる。1カ所擦痕が観察される。磨石としての使用後、Stone Boiling に用いられたもののが考えられる。長軸長9.3cm・短軸長7.2cm・重量640.5gを測る。

木材 (Fig.18)

102は、下層谷地形の底面から出土した。調査区東端にて出土したため、全体の取り上げは不可能だった。残存長45.4cm・最大幅14.5cm・厚さ3.3cmを測る。端部は、出土した際削れたためプライマリな状態ではない。樹皮が観察できず、板状に加工された木材であると思われる。

④検出面出土の遺物 (Fig.19)

103は、黒曜石製削器である。上部を欠損し、右側端部に Pebble 面を残す。両端に微細な剥離が観察される。残存長2.8cm・器幅1.0cmを測る。その他、黒曜石製打製石鏃1点・繩文土器・土師器細片が出土した。

その他、上層出土遺物の項で述べられなかつたが、上層、B-5 グリッドで器種不明の石製品が出土した (Fig.20)。やや粗な砂岩製で、先端部に6条、左端部に4条の溝が刻まれる。他の部分にも刻みが施されていると思われるが、後の敲打および砥石への転用によつて消えている。形状は各辺が内湾する略三角形を呈し、底辺の敲打が顕著である。器長13.7cm・器幅8.3cm・器厚2.0~1.7cmを測る。

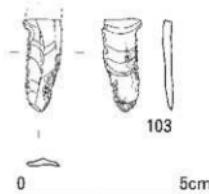


Fig.19 検出面出土遺物実測図 (2/3)

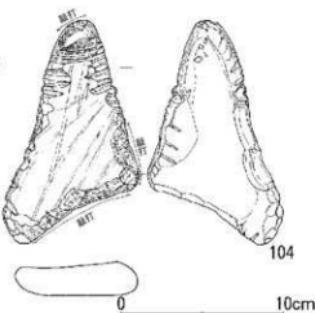


Fig.20 B-5 グリッド出土石製品実測図 (1/3)

3. おわりに

今回の調査では、周船寺遺跡群の東端という立地条件もあってか、検出構造は溝1条のみと少なかつたが、繩文晩期の多くの資料が出土した。土器の中では、胎土に滑石を含む細片が出土しており、前期曾畠式もしくは中期阿高式土器と思われるが、磨滅が激しく調査区近傍に該期の遺跡があるとは考えにくい。時期の下るものは、中世以降をのぞけば板付式系壺形土器の胴部と思われる小片が出土している。しかしこれらの遺物は出土遺物全体からみればごくわずかである。おおよそ繩文晩期から弥生前期にいたる遺物が調査区内に包含されていたといえよう。それでもやはり中核をしめるのは繩文晩期の遺物である。口縁部に蝶形の突帯を貼付ける浅鉢・深鉢など黒川式の特徴を有する土器が主体をなす。上層・下層とも遺物の型式から時期差は読みとれない。当初流水していた下層の谷地形が短期間に埋没した後、沖積地となって遺物を包含するシルトが堆積したものと思われる。下層に弥生土器は含まれないから、谷の埋没は繩文晩期の内であったのだろう。ただ、遺物は前述の通り少数ながら弥生前期まで確認できる。繩文晩期土器は磨滅も少なく、調査区周辺に規模の大きな集落が営まれていたと思われる。ただし、周船寺遺跡群の中でも集落の中心は頻繁に移動しているようであり、晚期のある時期を境に集落が移動したのか、弥生時代に入ると遺物は急激に遺物を減らし、壺形土器の小片を最後に遺物の堆積は終焉する。本遺跡の調査例は未だ少なく、集落の変遷などは調査例の増加をまって検討する必要があるだろう。



1. 調査区全景（北より）



2. SD01 溝検出状況（西より）



3. 下層谷状地形検出状況（西より）

PL.2



1. SD01 溝杭列検出状況（西より）



2. C-3グリット上層遺物出土状況（南より）



3. 下層谷状地形被熱礫出土状況（北より）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	すせんじいせき		
書名	周船寺遺跡		
副書名			
卷次	5		
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書		
シリーズ番号	第798集		
編著者名	阿部 泰之		
編集機関・発行機関	福岡市教育委員会		
発行年月日	平成16年3月31日		
市町村コード・作成法人ID	40135		
所在地	福岡市中央区天神1-8-1		
郵便番号	810-8621		
遺跡名ふりがな	すせんじいせきぐん		
所取遺跡名	周船寺遺跡群		
所在地ふりがな	にしくおおあざいいじ 921		
遺跡所在地	西区大字飯氏 921		
北緯	33° 33' 37"	東經	130° 14' 36"
調査期間	20020801 ~ 20020920		
調査面積	488.3 m ²		
調査原因	集合住宅建設		
種別	散布地・集落		
主な時代	縄文		
遺跡概要			
縄文 - 黒川式土器 + 石器 + 打製石斧 + 石皿			

周船寺遺跡 5

福岡市埋蔵文化財調査報告書第798集

平成16年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 陽文社印刷株式会社
福岡市南区大楠2丁目4番10号